

二〇一九年度

中古文学会秋季大会 シンポジウム・研究発表要旨

期日 一〇月二日(土)・二三日(日)
会場 関西学院大学

第一日 一〇月一二日（土）

大会企画

シンポジウム

「中古文学と学習指導要領の改訂」

趣意説明

〈基調報告1〉

〈基調報告2〉

〈基調報告3〉

〔趣意〕

人文科学を取り巻く研究・教育環境はますます厳しくなりつつあり、人文科学の役割を問い直すことが喫緊の課題となっていることは明らかである。近年、日本文学関連のいくつかの学会でも、研究と教育の架橋について考えるシンポジウムが開催されてきた。時代やジャンルを超えて、文学研究の意義を問い直し、文学研究の成果を広く発信していく可能性を探ることの重要性が共通の認識となってきたのである。

中古文学会では、二〇一八年度春季大会において「時空を越える中古文学―その普遍性を探る―」と題するシンポジウムを、続く秋季大会において「古典をいかに「発信」するか―文学・文化・文化財―」と題するシンポジウムを開催した。ふたつのシンポジウムは、個別の専門的な内容を扱いつつも、中古文学を研究することの根本的な意義を問い直すという取り組みであったと言えるだろう。

そうした問題意識を引き継ぎ、常任委員会において、本学会の今後四回の大会のシンポジウムを「古典の教育・普及」に関連するテーマ

で実施する方向性が承認された。その一回目となる二〇一九年度秋季大会のシンポジウムを、「中古文学と学習指導要領の改訂」と題して行いたい。

現在、戦後最大とも評される「国語」の改革が進行している。二〇一八年七月に告示された『高等学校学習指導要領解説 国語編』では国語科の新たな目標と科目構成が示され、二〇二二年から使用される高等学校の国語教科書の作成が現在進められている。同時に、センター入試の後継となる「大学入学共通テスト」を想定した「試行調査（プレテスト）」も実施され、それらすべてに対してさまざまな意見が飛び交っている現状である。

今回の「学習指導要領」の改訂では、高校生の古典の学習意欲を高めることが課題のひとつとされている。実際に、現行の「国語総合」の後継となる「現代の国語」「言語文化」のうち、「言語文化」の説明には「上代から現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める」という文言が盛り込まれ、学習時間の配当を見ても近代以降の文章の学習に比べて古典の学習に比重が置かれていることがわか

湘北短期大学〔教〕 小森 潔

北海道教育大学〔教〕 中島 和歌子

早稲田大学〔教〕 福家 俊幸

東京大学〔教〕 渡部 泰明

る。また、現行の「古典A」と「古典B」を統合した「古典探究」という科目も設置された。これまでに二回実施された「大学入学共通テスト」の「試行調査（プレテスト）」では、古文の問題に二回とも『源氏物語』が出題されており、一見、古典教育も中古文学も安泰のようである。

しかし、今後、教科としての「国語」において「古典」の退場の可能性が大きいことは、既に紅野謙介氏が指摘しているところである（『国語教育の危機―大学入学共通テストと新学習指導要領―』二〇一八年、ちくま新書）。また、伝統と文化の尊重のための古典教育という方向性への危惧の表明も多々見受けられる。

新「学習指導要領」の下、高校の「国語」で近現代の文学を学ぶ機会が激減することは必至である。では、古典文学教育はどのようになっていくのだろうか。この点については、未だ予測がつかないと言わざるをえない。

今回のシンポジウムは、このような現状を見据えつつ、その後の三回のシンポジウムにつながる具体的な問題点を抽出すべく、まずは、古典文学を学ぶことの意義、高校・大学における古典文学教育、国語科の教員養成、大学入試のあり方、そして中古文学会は何をすべきかといった問題について自由に意見を交換する場としたいと考える。

第二日 一〇月一三日(日)

研究発表 午前の部

新出、定家本『若紫』の紹介

—音読から読書へ—

龍谷大学〔客〕 藤本 孝一

池田亀鑑氏の研究により藤原定家の青表紙本と認定されている源氏物語は、前田育徳会尊経閣文庫蔵『花散里』『柏木』・文化庁保管『行幸』・安藤積産合資会社蔵『早蕨』の計四帖である。

今回、全く知られていない定家本『若紫』の五冊目が新出した。本書を紹介する。

〔検証〕

- 一、定家が注釈した『奥入』が書かれている。
- 一、紙質は透過光により繊維の塊が見られ、平安時代・鎌倉時代の「溜め漉き」方法により漉かれている。
- 一、表紙は、紺表紙の『花散里』『柏木』と一致し、題簽は、『花散里』『柏木』『行幸』と筆跡・料紙共、同一である。
- 一、本文の筆跡も他の四帖と同筆と認められる。

〔音読から読書〕

源氏物語が書かれた当初の鑑賞方法は、朗読していたという。それを読書用に書写したのが、定家である。この検証は、和歌の分かち書きにある。大島本・尾州本の和歌は改行だけで、本文と繋がっている。和歌を上句下句、二行に独立して書かれた最初の写本は、定家本である。それは、意識的に散文と韻文とを区別した書写方法により検証される。

菅原道真と改元

筑波大学〔教〕 谷口 孝介

菅原道真、十一歳の作と自注にある『菅家文章』巻頭詩の制作年次は斉衡二(八五五)年である。道真は、大宰府において死去する延喜三(九〇三)年にいたるまで、天安(斉衡四年改元)、貞観(天安三年改元)、元慶(貞観十九年改元)、仁和(元慶九年改元)、寛平(仁和五年改元)、昌泰(寛平十年改元)、延喜(昌泰四年改元)と、生涯にわたって七度の改元に立ち会ったこととなる。この間、元慶改元時には式部少輔であり、仁和改元時には式部少輔兼文章博士であったことから、元号の勘申に関わっていた可能性が高いと考えられる。しかしながら『菅家文章』などにおいて元号に関わる目立った言及は見られない。ところが逆に元号勘申に関わっていないことが明白な、讃岐守であった寛平改元時と大宰権帥であった延喜改元時には、それぞれ「読_二開元詔書_一。絶句」(巻四294)と「読_二開元詔書_一。五言」(後集479)との同題の詩を作成している。天子の輔翼として元号勘申に当たったであろう際には、天の時を管理する側にあった道真が、寛平度、延喜度にあつては、天時の支配を明確に受ける位置に立ったのである。そのことからこの両詩においては元号の意味付けがかえって鮮明に現れ出たものと考ええる。本発表では道真の元号観を明らかにしたうえで、その考え方が、かれが中心的に編纂に関わった『日本三代実録』の改元に関わる記述にも投影していることを論じる。

『うつほ物語』 諸本論再考

—前田本系統の位置付けをめぐって—

慶應義塾大学〔院〕 高橋 諒

現在四系統に整理されている『うつほ物語』諸本は、同一祖本から派生したとされる。そのうち、尊経閣文庫蔵前田家十三行本（以下、前田本）は祖本に近い形をとどめていると推定されていることから最善本とされ、現代、ほとんどの『うつほ物語』の刊本が、底本として採用している。

しかしながら、前田本および前田本系統の本文には、いまだ詳らかでない点がいくつか存する。

一つは、巻によって系統を異にする点である。これが従来諸本の系統図を立てることが難しい要因となっている。室町後期の古記録類によれば、当時この物語は既に完本で存することがまれであったと推測される。また、本文に見られる脱文・衍文の有無から四系統の先後関係を調査すると、必ずしも全ての巻が前田本系統から派生していないことが明らかとなり、前田本系統の伝本が実際は取り合わせである可能性が浮上する。

もう一つは、後水尾天皇から慶安四年（一六五一）に下賜されたという前田本の箱書の記述がこれまで等閑視されてきた点である。江戸前期の禁裏の蔵書目録にあたり、前田本ひいては前田本系統が禁裏本の流れを汲むことが推定できる。また、目録に記載される禁裏本の形からも前田本の箱書の記述を裏付けることができる。

以上、本発表では、前田本系統の位置付けを再考することで、現存する『うつほ物語』諸本の源流を明らかにし、その結論に基づき、新たな本文校訂の方針も提示したい。

『うつほ物語』の源季明一族、その離散と集結

早稲田大学〔院〕 小野寺 拓也

『うつほ物語』において、源季明の息子である実忠の物語は、これまで様々に論じられてきた。それぞれの論に首肯できる点があるものの、実忠はあて宮への強い思いが高く評価されたとする論がある一方、「実忠物語」は「社会的な死」を引き受けているとする論があるなど、個々の論者が注目する箇所によってとらえ方は大きく異なっている。

また、実忠は「国譲」三巻を中心として、実の兄弟との交流が色濃く描かれる人物でもあるのだが、彼の兄である実正や実頼、妹（または姉）の宮の君らの季明一族をまとめて論じたものは殆ど見当たらない。季明一族の離散と集結、そして交流が豊かに描かれる点は、仲忠の世代の男君たちが、「はらからの契り」といった擬似的はらから関係や、正頼家との婚姻関係によったコミュニケーションを形成しながらも、それぞれ兄弟をもたない、もしくは兄弟と殆ど交流していない、という点と好対照をなしているのである。

本発表では、従来あまり注目されてこなかった季明一族の描写を、他家の男君たちや、正頼一族との比較を端緒とし、分析してゆくことで、新中納言昇進を軸とした包括的な「実忠物語」読解を試みる。さらに、実正と実忠北の方との微妙な関係性や、物語の要所で描かれる、実忠と正頼の息子祐澄の関係の描写など、『うつほ物語』の人間関係の描写の豊かさが、点在する物語を結びつける一要素となっている点も、明らかにしたい。

『枕草子』の初期のドイツ語訳について

—フィッツマイヤー訳を中心に—

大阪大学〔研〕 フィットレル・アロン

『枕草子』は早くから欧米の日本研究者と翻訳者の注目を引いた平安文学作品の一つであり、十九世紀後半に数章段がドイツ語と英語とフランス語に翻訳された。その中でも最初の翻訳はフィッツマイヤー (August Pitzmaier, 一八〇八—一八七五) によるものである。フィッツマイヤーはヨーロッパの初期の日本研究者の一人であり、主に日本語学に実績があるが、『枕草子』の複数章段や『和泉式部日記』全文などをドイツ語に翻訳することで、これらの作品の最初の西洋の翻訳者でもある。

フィッツマイヤーの翻訳は極めて直訳的であり、平安時代の言葉表現に関する理解の不十分による誤解と誤訳が少なくないものの、第一人者としての平安文学の理解と伝達がどのように行われたのかという観点から見て興味深い事例である。

本発表では、フィッツマイヤーによるドイツ語訳『枕草子』に見られる、平安文学の特徴的な表現方法、および日本文化特有の物事の翻訳における伝達について、翻訳者が参照した辞書類などの文献と十九世紀後半から二十世紀前半の間に成立した二種のドイツ語訳と最初の英訳とも比較しながら検討する。一方、フィッツマイヤー訳『枕草子』に脚注も施されている。その多くは底本とした『枕草子春曙抄』の北村季吟による傍注と頭注によるが、フィッツマイヤー独自の注も見いだせる。これらの脚注も参考にして、フィッツマイヤーの『枕草子』および平安文学の研究について明らかにしたい。

物語文学における乳児の「物語」

早稲田大学〔院〕 小泉 咲

平安時代の作品の中に、乳児が「物語」する場面が見られる。この「物語」は、「幼児の意味のないたわごと」「喃語」等と解されてきた。そうした従来の解釈はおそらく間違っていないだろう。しかし、なぜ乳児の発する意味の掴めない言葉が「物語」という語で表現されているのか。その点についての踏み込んだ考察はこれまであまりなされていない。

そこで本発表では、平安時代の物語文学にみられる乳児の「物語」の用例をできる限り検討した上で、それらに共通する特徴を探り出すとする。まず、「物語」する乳児の姿が語られる際には、たとえば乳児の「うち笑む」様子などの定型的表現がみられる。そして、そうした表現と共に、周囲の人々、すなわち乳児を見つめ、その「物語」を聞き取る人々の様子が語られていることも留意されよう。特に『源氏物語』以降の作品においては、「物語」する乳児を複雑な思いで見つめる周囲の人物たちが語られるようになるという傾向が見受けられる。以上の点を捉えた上で、乳児の発する意味の掴めない言葉を「物語」と称する表現は、そもそもは周囲の人々が乳児の言葉を「物語」に見立てたものであったのが、『源氏物語』以降はそれを踏まえて、乳児の「物語」の背後に物語作品そのものの内容を感じさせるような表現となっている可能性があることを示す。

『源氏物語』玉鬘十帖における六条院像

—胡蝶巻における船樂・季御読経を端緒として—

龍谷大学〔院〕 藤井 華子

『源氏物語』の玉鬘十帖は、独立性の高い巻々として知られている。玉鬘巻から真木柱巻までの玉鬘十帖は、夕顔の遺児である玉鬘をめぐる人々の動向が語られていく巻々である。これらの巻では玉鬘求婚譚を語っていく一方で、六条院の四季を描く年中行事絵巻的な性格を有していることが指摘されている。すなわち、玉鬘十帖では六条院という場が前景化し、折々の行事・催しが行われる六条院の姿が語られていくのである。

従来、玉鬘十帖における六条院の在り方については、六条院が「仙境的」に語られていくことを通して「理想的」空間として示されていることがいわれてきた。それらの先学の指摘の背景には、胡蝶巻における船樂・季御読経での六条院の邸宅・庭園の仙境表現がある。しかし、玉鬘十帖というひとまとまりの物語を通して六条院をとらえたときに、一貫して六条院が「仙境的」に語られているとは言い難い。また、六条院での各催しの具体相は検討されてきたものの、玉鬘十帖を通してどのような六条院像が立ち上げられているかは明らかにされていない。また、折々に語られていく六条院の音楽の在り方に注目してみると、時節のみならず建築や風景との親和性が非常に高いことがわかる。

そこで本発表では、胡蝶巻における船樂・季御読経を端緒として、玉鬘十帖における六条院像について、音楽を切り口として考えていきたい。

『細流抄』における『河海抄』享受の諸相

—『一葉抄』の影響に着目して—

広島大学〔院〕 渡橋 恭子

三条西実隆著『細流抄』（永正八―一〇年）は、当初、山脇毅氏によつて、実隆の講義を受けた息公条の記録ともいふべき『聞書』を整理したものが現存する本文であるとされてきた。しかし、後に伊井春樹氏によつて公条の『聞書』（学習院大学蔵本）が紹介され、同書は後代に成立した『明星抄』に近い本文であるため、『細流抄』の原初形態とはいえないとされた。そのため、『細流抄』がいかなる注釈書の影響を受けたのかは未だ明らかにされておらず、検討の余地が残されている。

発表者はこれまで、三条西家の注釈書にいかん『河海抄』の注が取り込まれているのかを検討する過程で、実隆著『弄花抄』に連歌師である藤原正存著『一葉抄』（明応四年）の注が多く含まれていることを明らかにした。

そこで、『細流抄』においても同様の傾向がみられるものと考え、本発表では『細流抄』の中で『河海抄』の注が掲げられている箇所を『一葉抄』と比較検討する。これまで『一葉抄』と他の注釈書との関わりについて論じられた例は少ないため、実隆が、同時期に成立した『一葉抄』から何を享受したのかを解明していくことは重要な作業といえる。

本発表では、『細流抄』の中で『河海抄』が典拠として明記されている注一三五件のうち、同様の注が『一葉抄』にみられるもの二九件を対象として、『一葉抄』による『河海抄』の解釈が『細流抄』にいかなる影響を与えているのかを検討する。